

# 樋口一葉「にぎりえ」の世界

閻 萍

## The World Higuchi Ichiyo's World "Nigorie" (Muddy Waters)

Yan Ping

### 1

樋口一葉「にぎりえ」は、19世紀末（明治20年代）の日本の下層社会に目を向けた写実性の高い、極めてく日本的な作品である。筆者は一葉の描く女たちの運命に強い関心を持つものであり、この女たちがいかに形象されているかを中心にして「にぎりえ」の世界を考察し、一葉と現実社会とのかかわりの様相について論じてみようと思う。

それは日清（甲午）戦争後の資本主義の発展のかけで、貧民問題などの社会矛盾が激化しつつあった時代で、文学の世界でも、田岡嶺雲などの社会評論家の影響の下に、悲惨深刻な社会問題が題材に取り上げられ、いわゆる悲惨小説や傾向小説が現れていた<sup>①</sup>。この現実社会の暗黒面を、作家一葉はどのように表現しているのだろうか。

言うまでもなく、文学は社会の産物であり、その社会の人間を描写することによって、その社会の生活を表現できる。人間と社会生活の関係を描写する中に、作家の意志と生活の評価は自から含まれるであろう。例えば、ここで取り上げる「にぎりえ」も、一葉が自分自身あるいは自分の周囲の人間の生活を〈芸

術加工〉して描いた作品であり、彼女には最初から社会問題を暴露するといった明確な意図はなかったかもしれないが、その作品の世界は当時の社会問題を鋭く告発するものになっている。

一葉は早熟な作家であった。父が病没し、法定相続人になった一葉に樋口家では全幅の期待を寄せた。この時樋口家は窮乏を極めていたので、一葉は文学を〈謀生〉の手段にしたのである。〈謀生〉は作家に人生というものを考えさせ、その苦しみと辛さが彼女の目を社会に向かわせるであろうことは容易に想像できる。すなわち、自らの運命の不公平を意識するとともに、その周辺社会の現状に対するさまざまな思考を、あげて小説の素材にしていったのである。

「にぎりえ」（『文芸倶楽部』第1巻第9編）は1895（明治28）年、一葉が24歳の時に発表された。25歳までしか生きなかった作家の、これは晩年に属すが、しかし〈謀生〉に苦勞をかさね、早逝した彼女にとっては創作の成熟期と言っていいであろう。このころ一葉は「文学界」の文学者たちと頻りに接触している。北村透谷のように、人生と芸術とを厳粛に考えていた人々の存在を知ったことは、一

葉の人生観に大きな影響を与えたであろう。この間の一葉の人生や社会に対する見方は、けっして今日普通の24歳の女のものではなかった。

彼女は作家の立場に立って社会や道徳、人情などを観察した。そして、虚構のなかで、運命に負けず、貧困や挫折と戦うとともに、人生について、なぜ自分の周辺にいる人たちは、いくら頑張っても貧困を切り抜けることができないのであろうか、と考えたのである。もちろん彼女の観察と思索は、彼女自身の生活を告白していると思われる部分において、もっとも生彩があり説得力を帯びているのであるが、いずれにしても、厳しい現実に対抗する自らの力量の弱さに対する、堪え難いほどの懊悩が「にぎりえ」創作の根本的な心態であったと思う。

一葉文学の社会性は、彼女の特異な表現手法によって達成された。彼女をとりまくさまざまな貧困の表現は、いかに努力してもそこから脱却できない現実の苦境に発した真実性ゆえに、社会の悲惨を抉剔する客観的価値を持ちえたのである。

## 2

従来「にぎりえ」の人物論は、当然ながらシテ役としての「お力」、次いでその「お力」をめぐる「結城朝之助」と「源七」に焦点を絞って論じられてきている。しかし、下層社会にあがく不幸な女は「お力」やその仲間の酌婦たちだけではない。かつて「少しは巾もあった蒲団や」でありながら、「今は見るかげもなく貧乏して、八百屋の裏の小さな家にまいまいつぶろの様になって」いる人（源七）の妻「お初」もまた、単なるワキ役的人物に止まるものではない。逆境にあって勝気に生きる一葉の分身として、しばしば「お力」があげられるが、蟬表の内職で一家を養う「お初」の苦労は、一葉や母滝・妹邦子の〈謀生〉の姿を写している点で、より密着し

た分身であったと言えるであろう。

この「お初」と「お力」との関係は「源七」によって結ばれている。「お力」は「源七」にとってどんなに貧乏しても忘れられない、未練ののこる〈理想〉の女性であり、「お初」はふたりの間に「太吉」という子のある〈現実〉の女房である。「源七」はこの二人の女に対して情念と物質（生活）においてそれぞれ分裂して依存しており、その不安定な状態から脱却できないでいる。それはもっぱら「源七」自身の責任のようであるが、しかし、よく読んでみると、「お初」も、そして「お力」さえ、女として「源七」という男に依存していることがわかる。言うまでもなく「お初」については、

あれを思ふに（男をだますのは）商売人の一徳、だまされた此方の罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ。夫よりは気を取直して稼業に精を出して、少しの元手も拵へるように心がけて下され、お前に弱られては私も此子も何うする事もならで、夫こそ路頭に迷わねば成りません。（四）

などの言葉があつて、彼女と子供の存在（生活）が全面的に「源七」に依存していることが明らかである。一方「お力」については、話の発端に、

気をつけてお呉れ、店先で言はれると人聞きが悪いではないか。菊の井のお力は土方の手伝ひを情夫にもつなどと考違へをされてもならない。夫は昔しの夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞て源とも七とも思ひ出されぬ。（一）

とあつて、「源七」との依存関係は、生活面はもちろん愛情においても、今ははっきりと切れているように見える。

前者の「お初」の「源七」説得の言葉は、

たしかに「常識的な論理」<sup>②</sup>であるし、先に続けて「お金さへ出来ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別荘こしらへて囲うたら宜うござりましょう」と言うにいたっては保守的な体制を一步も出ていないように見える。しかし見方を換えれば、これらの言葉は、与えられた枠内で自分の立場、夫への依頼心を堂々と主張し、妻としての権利を要求しているものと読める。

それに対して「お力」のそれは、伝法肌のさっぱりしたものの言いようで、いかにも「お初」と対照的である。しかし、物語の展開につれて、彼女の言葉の背後に「源七」への依存心が抑圧されていることがわかるのである。

### 3

まず、「お力」について考えてみたい。「お力」に初めて出会った客「結城朝之助」は「お前のやうな別品さむではあり、一足とびに玉の輿にも乗れさうなもの」と言う。確かに「お力」のような女が〈出世〉するためには「玉の輿」に乗ることであろう。かつては「源七」であり、今は、たとえば当の「朝之助」である。しかし「お力」は「此方で思ふやうなは先様が嫌なり」(二)とか「女夫やくそくなどと言つても此方で破るよりは先方様の性根なし」(二)などと言い、絶望のあげく、自らを「賤しい身の上」と言い、「私が身の自墮落」「もとより箱入りの生娘ならねば」(六)と言い落とし、「世間さま並」の女房の座などしよせん望むべくもないことを訴えている。〈出世〉の意欲どころか、自分自身が実は「(女房に)持たれたら嬉しいか、添うたら本望か」それすら分からなくなっている。

(奥様に)持たれるは嫌なり、他処ながらは慕わしし、一ト口に言はれたら浮気者でござんせう。ああ此様浮気者には誰れが

したと思召、三代伝はつての出来そこね、親父が一生もかなしい事でござんした(六)

「お力」が己が家系の暗い宿縁について長い告白を語り終えた時、突然「朝之助」に「お前は出世を望むな(「な」は詠嘆・強調の意)」と言われる。「お力」は一瞬驚くが、続く言葉は「私等が身に望んだ処が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬ」と答えている<sup>③</sup>。いくら「朝之助」に惚れても酌婦の身の卑賤さを痛感していた「お力」は、もはや「朝之助」とは〈ただ一晚の夫婦〉でしかないことを自覚している。

さて、このような「お力」にとって「源七」とはいったいどのような存在なのか。丁度一年前の「去年の盆には」すでに「揃ひの浴衣をこしらへて、二人一処に蔵前へ参詣」(七)するような仲であったと書かれている。その初回ははっきりしないが、「久しい馴染」であることは明らかである。

「(略)馴初はざら一面、手紙のやりとりは反古の取かへっこ、書けと仰しやれば起証でも誓紙でもお好み次第さし上げませう。女夫やくそくなどと言つても此方で破るよりは先方様の性根なし、主人もちなら主人が怖く、親もちなら親の言ひなり、ふり向ひて見てくれねば、此方も追ひかけて袖を捉らへるに及ばず、夫なら廃せとて夫れ限りに成ります。 (略) 」とて寄る辺なげなる風情、(二)

ここには酌婦の「お力」が出会った幾人かの客とままならぬ関係が、ある絶望とともに語られている。「源七」が「お力」に未練をもっているのは明らかである。しかし、「お力」もまた、口では確かに「源七」に対して〈冷嘲熱諷〉であるが、内心では絶えず「源七」のことを気にしている。「朝之助」と

逢っているときでさえ、「申談はぬきにして」語り出し、また、その子「太吉」にもつい余計なこと（お菓子を買い与える）をしてしまう。それも「お力」の心の中に「源七」に対する愛情が依然として燻っているからであろう。この「寄る辺なげなる風情」のよって来たるもとの原因に「源七」がいることをこの箇所は暗示しているように思う。

そこで、一葉の作品構想の型からの推測になるが、「源七」は、まだ羽振りのいい蒲団屋であったとき、「お初」と別れて（あるいは、まだ「お初」と一緒になる前）「お力」を妻にしようとする約束しながら、それを反古にしたようなことがあったのではないかと、つまり「お力」にはかつて「源七」に裏切られたことがあったのではないかと、という想定である。勿論このことは「源七」に「お力」への愛情がなかったことを意味しない。酌婦の身分である「お力」を配偶者にするには、「お力」の先の言葉にもかかわらず、明治の封建社会下でもやはり決断のいることであったにちがいない。そうした愛情とは別の要因が「お力」の「気位」（自尊心）を傷つけ、〈出世〉を絶望させたのではないかと。このように考えることによって、その後の「お力」の言動がよく説明できるように思うのである。

「お力」はその意味で、彼女自身もまた江戸から明治への激動下の家系の宿世に呻吟する、憐れむべき善良な女であった。それに対して「源七」の「お力」に対する愛は一種の〈甘え〉であり、男のエゴイズムであったと言わざるをえない。最後の「お力」と「源七」の死について、しばしば無理心中か合意かと論じられるが、「お力」の愛と善良さがその前提にあったことを見逃すべきではあるまい。女が自身の〈出世〉を男に託そうとする限り、いくら戦っても最後は敗北者になってしまう。「お力」はそのことに無自覚であった。そこに明治の現実社会の苛酷さと、その時代に生きる女の不幸な運命を痛感させ

られると共に、「お力」がそうした女の典型として形象されていることに注目されるのである。

#### 4

「菊の井」に棲息する女たちの苦悩は、他の世界のそれとは違う。「お力」の〈生〉は、後に説くような「お初」が強制された現実の不合理な〈生〉とは全く異質の、歪んだ非正常なものである。

お力は一散に家をして、「行かれる物なら此ままに唐天竺の果てまでも行つて仕舞たい、ああ嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の声も聞こえない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない処へ行かれるであろう。つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら。これが一生か、一生がこれか、ああ嫌だ嫌だ」（九）

この同語や類語をリフレインさせた、鬱々たる心情の吐露は「お力」が自らの「悪業」を憎悪するあまりの溜息である。いかにしてこの汚辱に満ちた「白鬼」の生活に終止符をうち、魔窟から脱出できるのであるかという——。加うるに「お力」は人の世の移ろい易いことにも気がついていて、酌婦たちにとって若さは最も強力な資本で、いまの「お力」は仲間の中では「年は随一若い。しかし自分もまたいつかは「昔は花よ」という立場になっていくに違いない。このような世態の〈炎涼〉は朋輩たちの境遇にまざまざと表れていた。彼女が「どんな疲れた時でも床へ這入ると目が冴えて」さまざまなもの思いから逃れられないのも、そうした絶望的な宿運の見過してしまうことの虚しさがあるからであろう。

「お力」は「ものぐるひ」の虚無的自棄的

な人生観を抱いていたが、その若さゆえか、〈生〉と〈死〉の果てしない葛藤に苦しんでいた。言い換えれば〈いかに生きるか〉という、時には〈いかに死ぬか〉という、脅迫観念におびやかされていたのであった。

「朝之助」に〈出世〉の願望を指摘され、その「玉の輿」に乗ることも考えないわけではないが、「お力」は彼の愛にもなんとはなしに行きずりの無責任さを嗅ぎとっており、信を託せる男ではないことに気がついているようである。また確かに「朝之助」は「お力」の身の上について、いろいろ詮索しているが、しかしそれは異世界の住人に対する好奇心ではあっても、それ以上のものとは思われない。

一方、「源七」との関係は、物語の発端で「お高」の口に語らせているように、仲間内では公然のことであったらしい。「お高」は「お力」がまだ「源七」を捨て切れていないことを知っている。同時に「お力」の「気位」ゆえに、その関係が発展し「一処になる」ことなどありえないとも言っている。盆の十六日の、先に引いた「お力」の突然の出走は、「源七」に対する愛情と絶望の矛盾・葛藤に混乱し、懊悩する姿ではないのか、と思う。

「源七」へのいかにも冷淡な言葉にもかかわらず、その子「太吉」への「お力」の何気ない行為が、それまで辛うじて保たれていた「源七」「お初」夫婦の決定的な亀裂をもたらしてしまう。このことはすでに指摘されていることであるが<sup>④</sup>、「お力」の素直な愛がその意に反して「お初」の憎しみを生み、彼女自身も望んでもいかなかった事態を引き起こしてしまった。そして、このほんのちょっとした心の露呈が、結局「源七」を、そして「お力」自身を破滅に向わせてしまう。「お初」を去らせた「源七」に迫られた「お力」は、己れの業の深さに全くうちひしがれてしまったに違いない。「玉の輿」など思いもよらず、

せいぜい「味噌こし」が落ちと洒落のめしつ、そこに一縷の生の願望を潜ませていたが、その願望がくいちがって不幸を生じさせてしまった。まさにこのことが彼女の〈死〉への跳躍台になったのである。「お力」の生の終点が心中死となるのは、合意か無理かを超えて、彼女の〈弱さ〉の逃れられない宿命であったと言える。

結局、女が現に落ち込んでいる地獄の、酌婦の身分から、男に依存して〈出世〉するという方途を選ぼうとすること自体の中に無理があったというしかない。そのような社会の制度が「お力」を刺した真の刃であったと言ってもいい。作者一葉が「お力」の人生を非業の死で終らせたのは、そうした制度の中に生きる女の運命を真剣に追求して行った結果であると思う。そして、その〈弱い〉「お力」に同情はしていても、肯定はしていない。「にごりえ」で一葉が描きたかったのは女の〈出路〉の問題であり、「お力」の〈弱さ〉を通して、女の悲劇が個人的なもの、家のものである以上に、社会的なものであることを訴えているように、筆者には思われる。

## 5

さて、次に「お初」について考えてみたい。作者一葉はしばしば封建の壁から脱出を計った最初の女性と言われているが、私見では、よく論じられる「お力」でなく、むしろワキの「お初」に、その封建の壁から脱出しようとする〈強い〉女が描かれていると思う。「にごりえ」の世界の構造は、一つは「お力」と「源七」のシテの世界で、それを卵の黄身とすれば、もう一つは「お初」や「朝之助」の、卵の白身にあたるワキ世界である。いわば二つの世界が卵型あるいは入れ子型の二重構造になっている。そして一葉が前者の黄身の世界に希望を託していなかったことは、「お力」「源七」の最期を〈死〉で終らせている点に明示されている。それに対して、後者

の「お初」の世界は〈生〉に向う道であって、それゆえここにも「にぎりえ」の重要なテーマがあったと思う。

「お初」は親も兄弟もない孤独な女であり、伯父さんを仲人に立てて「源七」の所に嫁入りした。何事であろうと、妻は夫に従うのが封建遺制の世のいわゆる〈良妻賢母〉像であった。しかし、「にぎりえ」の中の「お初」の地位は実際には「源七」と対等のような感じがする。「お初」の生活のための努力と不甲斐ない夫「源七」に対する説教は現実を直視して、非常にしっかりしたものであるし、それに対して「何の此身になつて今更何をおもふ物か」と言い訳けしながら、「ころりと横になつて胸のあたりをはたはたと打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも、思ひにもえて身の暑げなり」(四)と描かれている「源七」は、「お初」の前にいかにも無気力である。「お初」が単なる世話女房以上の、この「家」の〈主〉たる位置にあることがわかるのである。

「源七」の家の秩序は、夫が〈主〉の位置から〈従〉に、妻が〈従〉から〈主〉に近づく、というように顛倒している。これは封建的な社会の秩序を逆転させている。この観点からいえば、「お初」「源七」の関係の破綻は、直接きっかけは「お力」にあっても、必然の成り行きであったといえよう。このような秩序の顛倒が「お初」の生き方、やり方によってもたらされたことは、もつと注目されていることであろう。

貧にやつれた七つも年の多く見えて、お歯黒はまだらに生へ次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらし鳴海の浴衣前と後を切りかえて、膝のあたりは目立たぬやうに小針のつぎ当、狭帯きりと締め蟬表の内職、盆前よりかけて暑さの時分これが時よと大汗になりての勉強せはしなく、揃へたる簾を天井から釣下げて、しばしの手数も省か

んとて、数のあがるを楽しみに脇目もふらぬ様あはれなり。(四)

このような「お初」についての表現はひとりの運命に負けない勤勉な〈労働婦人〉を形象しようとしている一葉の意思をつよく感じさせるのである。このイメージには、「お初」の性格の〈強い〉面が自然に溢れている。彼女は世話女房に満足しないで、夫と協力する妻でありたいと思っている。もちろん、崩壊に瀕している家庭を立て直すことを夫に期待して、必死の哀願もしている。しかし、「女に魂を奪はれ「可愛き子をも餓へ死させるかも知れぬ人」に、もはや「詫びたからとて甲斐はなし」と一旦「覚悟し」てからの「お初」は、それまでとは一変し、決然とした行動をとる。「此子はお前の手には置かれぬ、何処までも私が貰って連れて行きます」(七)と小風呂敷一つさげて出ていく「お初」は、まさに凜たる〈不屈的、堅強的な〉慈母の相貌を見せるのである。

「お初」は「源七」の手を離れた。「源七」を封建的な夫権没落の化身とすれば、「お初」が「源七」の家を出たのは、いわば封建制度の〈腐朽の門〉を出たことになる。「太吉」という新しい希望を抱きながら、自立した〈生〉の道、より困難な道を歩み出したのだと言っても過言ではないであろう。

「お初」は通説の説くように、いわゆる儒教的な女訓の〈良妻賢母〉でないとは言えない。しかし、それは明治後期以後の日本的に矮小化されたものでなく、明治前期の本来的な儒教的倫理観に基づく〈賢妻良母〉、つまり自立的、自尊的、自愛的な近代的主婦像としてのそれである。彼女が「源七」の家を出奔したという事は、その旧体制と戦う決心をして、自分の手で生計を立てる自立への道に歩を進めたことを意味している。これも一葉の「にぎりえ」執筆の主眼の一つであったと考える。一葉は「お力」の〈死〉で封建制度の犠牲

者を、「お初」の〈生〉で封建制度への反逆者を描いた。卵型ないし入れ子型構造の二つの世界を、このように対照的に構想することによって、一葉は女性の実存を訴えようとしたように見える。こういう視点から言えば、「にぎりえ」という小説は、写実的なリアリズム文学であるばかりでなく、女性解放のための啓蒙的文学という側面を持っていることがわかる。

#### 注

- ①松沢信祐『近代作家入門』桜楓社
- ②前田愛「『にぎりえ』の世界」（『樋口一葉の世界』一九七八・一二 平凡社刊）
- ③この「お力」の驚きは、「朝之助」の言葉が「お力」の暗い宿世の奥底に潜む欲求すなわち、抑圧されていた〈出世〉願望を一瞬顕在化させたことを示している。  
従来も「お力」の「胸中の秘密」、熾烈な〈出世〉意識が指摘されたための驚きと解釈されてきたが、その後の前田愛によって「たんに『胸中の秘密』をいいあてられたためだけではなく、「めいめいが抱えている内部世界の断絶を認識した」ものだとする新しい解釈が提出された（注②）。しかし、両者の住む世界つまり「昼の世界、生の世界」と「闇の世界、死の世界」の隔絶を示すという視点については十分首肯できるのであるが、「胸中の秘密」をいいあてられたためだけではなく、とあるように、驚きの具体的意味はかならずしも明確になっていない。意外のことをいわれたための驚きとしても、「お力」の〈出世〉願望の潜在を否定することにはならないであろう。
- ④注②、木村真佐幸「『にぎりえ』一視点 「お力」と「お初」の位相」（札幌大学教養部・短大部紀要）など。